障害者×スポーツ体験＝無限大
～スポーツから広げる多様性文化の創造～

○井上 渉（就労移行支援事業所INCOP京都九条　代表）
○境 浩史（株式会社島津製作所 人事部　シニアエキスパート）

１　概要

就労移行支援事業所INCOP京都九条（以下「“INCOP”」という。）は、京都駅から徒歩10分に位置している。弊社は、井上の京都市立支援学校での進路指導主事としての経験を活かし2023年２月に開所した事業所である。社訓に「やってみよう！」を掲げ、生の経験・体験の機会を重視した「超実践型トレーニング」を利用者に提供している。また、就労だけでなく、生活、余暇を含めた「WorkとLifeのINCOP」を目指し、日々サポートしている。知的障害や発達障害のある利用者が多く在籍している。

その中で、2023年９月より株式会社島津製作所ラグビー部「SHIMADZU Breakers」（以下「“Breakers”」という。）との連携を開始し、「スポーツを通した就労支援」に取り組んできた。“Breakers”は社会人チームとしてトップウエストAリーグにて活躍しているラグビー部である。”Breakers”との関わりを中心にしながら、活動の広がり、利用者の学びや成長について紹介したい。

２　「SHIMADZU Brakers」との連携のきっかけ

株式会社島津製作所とは、代表が特別支援学校勤務時からつながりがあり、実習、雇用と連携していた。また、島津製作所が主催した障害者向けのテニス教室実施でも連携をしていた。

“Breakers”では、スタッフが少ないため控えの選手が試合会場の準備や試合中の水分補充をしていて、ウォーミングアップが十分できていない状態の中、途中交代で試合に入るような状態であった。

“Breakers”のニーズ	“INCOP”のニーズ
・選手が試合に集中したい ・ホームゲームの運営を充実したい	・利用者の体験の場を増やしたい ・スポーツで見識を広げたい

“Breakers”と“INCOP”のニーズを組み合わせ、まずは、ホームゲームの準備、片付け、また試合中の選手の水分の補充といった試合中のサポートを“INCOP”とともにやってみようとスタートした。

３　活動の軌跡

2023年秋シーズンからの連携で、２シーズンを経過し、2025年11月は３シーズン目を迎える。印象的な事例を紹介する。

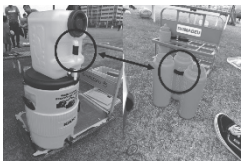
(1) エピソードとのその含意

ア　理解を深める

連携することは決まったものの“Breakers”の選手・コーチ陣は、障害理解が十分でないということもあり、「何ができるのか」「どこまで頼んでいいのか」と不安があった。事前に打ち合わせはするものの、はじめは当日、現場でチーム、利用者、支援者で都度相談しながら活動を進めていった。しかし、未知からくる不安は、関わりをもつことで既知になり、できること、難しいことも自然と洗練されていき、役割の定着につながった。さらに役割を果たすことで、信頼につながり、初めは依頼されていなかった受付での業務や試合写真の撮影、花道や円陣への参加といった役割の拡大にもつながっていった。

イ　作業を改善する

試合中の水分補充で、水とスポーツドリンクの２種類のタンクから黒い目印で判別しながらボトルに入れていく、という工程がある。「目印がある方がスポーツドリンク」を間違う、判別に時間がかかる利用者が多かった。ある利用者から、「スポーツドリンクの補充のタンクに同じ印をつけたらわかりやすくなるのでは」と提案があった。その意見を“Breakers”側に伝えるとすぐに対応していただけた。すると、利用者の作業効率が格段に上がり、スムーズに水分補充できた。このことが、利用者の自信につながったことはもちろんであるが、“Breakers”にも「ちょっとした工夫をすれば色々なことができる人たち」と認識してもらう大きなきっかけになった。


目印の工夫

ウ　連携作業を学ぶ

作業の多くは、複数名でないとできないため、声を掛け合って動く必要性が生まれる。また、“Breakers”の選手・コーチ・スタッフとも連携する必要があり、報告・連絡・相談などを瞬時におこなう場面も多く存在する。そのことが、声を掛け合う習慣を身につけ、協力する力を養う場にもなっている。普段はおとなしい方が、まわりに声をかけながら活動を支えている場面が見られたり、少しずつ声を出そうと頑張ったりという成長が見えている。

エ　視野を広げる

利用者のほとんどはラグビーのルールを知らない状態で活動をスタートしている。はじめは、いつ点が入るのか、どういった状態なのかもあまりわからないまま活動していることも多かった。活動を重ねることで、試合の動きが分かるようになり、見通しを持って活動できるようになるだけでなく、ナイスプレーに歓声をあげられるようになり、水分補充を忘れて試合観戦に集中する利用者もいるほど、チームを「支える人」そして「応援する人」に「成長していく」様があった。

オ　誇りを感じる

“INCOP”の利用者は“Breakers”のチームカラーにちなんで「レッズ」という愛称をもらって、チームの一員として位置付けられている（今年度から公式資料にも明記していただいている）。「レッズ」としてチームの一員としての位置づけが、利用者の帰属意識を高め、一種の誇りを感じている方もいて、そのことが一層の自己効力感を得ることにつながっている。

カ　関係を深める

当初は、活動の取りまとめとなるコーチ陣との連携がほぼであったが、回数を重ねることで、他のスタッフ、選手から直接声をかけられる事が増えた。ちょっとした「こっち手伝って」を気兼ねなく声をかけてもらえることは、互いの信頼関係、“INCOP”の利用者への理解が高まったからであると感じている。

また、過去２回、京都で開催される田んぼラグビーにも“Breakers”と“INCOP”共同で出場した。その場でも選手、コーチと利用者が一緒にプレーし、泥にまみれて、関係も深める機会になった。

キ　就労につながる

この活動を通して、「“INCOP”の利用者ならこんなこともできるのでは？」と島津製作所グループ内で障害者雇用の職域が広がり、実際に“INCOP”の利用者も就労している。“Breakers”の選手も職場の上司として在籍し、ラグビーを通して培った信頼関係が新しい職域、職場にもつながっている。

⑵ 現在の活動

主に準備・片付けと試合中の活動に分けられる

＜準備・片付け＞

・選手・関係者用のテントの設営（撤収）
・応援席の設営（撤収）
・キッズエリア（キックターゲット等）の設営（撤収）
・受付の設営（撤収）、受付業務（選手名簿、応援旗等の配布）
・ゴールポストガード、得点版、タッチフラッグの設置（撤収）

＜試合中（アップ時含む）＞

・選手用ドリンクの準備
・スコアボード管理
・広報用写真撮影

試合準備

活動の様子
受付準備

水分補充

上記の活動は、“Breakers”のスタッフ数名と一緒に準備していて、細かな指示が無くても“INCOP”がある程度自立して準備できることも増えている。今までの経験の中で、“INCOP”利用者も手順、方法が見通せるようになり、“Breakers”も「こう言ったら、こうやってもらえる」といった指示や準備の要点がつかめてきたことが大きい。また、受付業務をはじめとしたチームの顔となる業務を任せていただいていることも、お互いの信頼の高まりを象徴している。

４　今後について

障害者の地域社会参加という言葉は使い古されたほどよく使われるが、実際にまだまだ参加の社会へ広がる余地があるように感じている。今回、「ラグビー」というスポーツを通して、「プレーする人」「支える人」「応援する人」が障害を越えて連携し、勝利を目指し、共有していく姿は、障害者の社会参加にとどまらず「多様性文化の創造」がそこにあった。多様な人が、１つの目的を共有し、それぞれの立場で役割を果たす、という文化がここにある。スポーツ体験には、この文化を色々な場所に広げて、大きくしていく力、可能性があることを実証している。スポーツの持つ無限の可能性を信じ、我々は他の場所でもスポーツを通した障害理解に努めている。以下は現在“INCOP”が取り組んでいる活動の一例である。

・京都マラソンにおけるボランティア
・京都ハンナリーズ（B.LEAGUE所属プロバスケットボールチーム）におけるボランティア
・滋賀国スポ・障スポにおけるボランティア

ともに働く力を高めるために重要な場と位置付け、効果的に活用している。さらに、「応援する人」としての可能性をもとに、利用者とスポーツを余暇としてつなぐ取り組みにも注力している。

これらの取り組みがきっかけとなり、スポーツを通した新たな文化が無限に広がっていくことを切に願っている。

【連絡先】
井上　渉
就労移行支援事業所INCOP京都九条
e-mail：incop.inoue@gmail.com